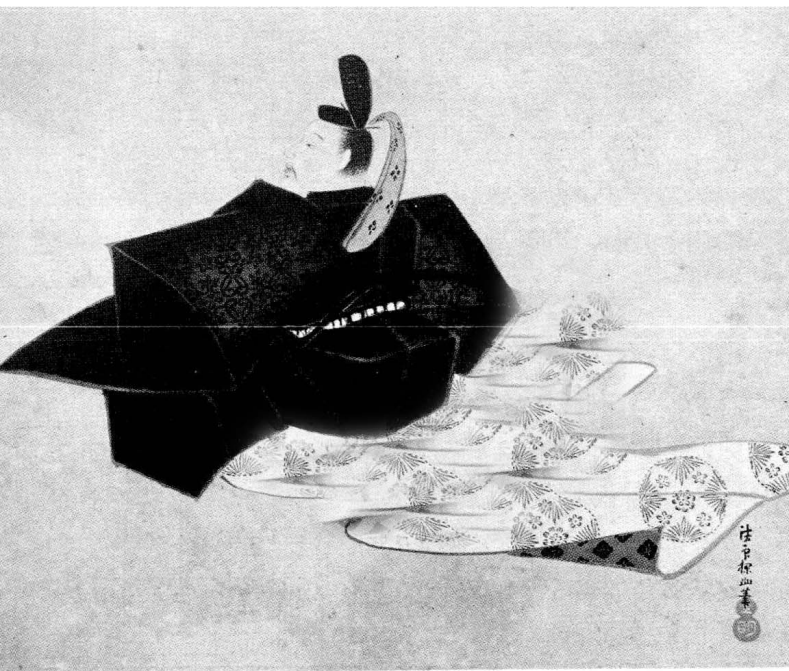


百人一首

安東次男

新潮文庫



藤原定家の肖像 狩野探幽画「百人一首画帖」

(写真 平凡社刊 別冊太陽「百人一首」)

ひやく
百



高校図書館用

新潮文庫 草 191 A

昭和五十五年四月一日発行

著者 安東 次男

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二一
振替 東京四一八〇八番

装幀 福田喜兵衛

◎ 印刷・二光印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

© Tsuguo Andô 1980 Printed in Japan

乱丁・落丁のものは本社にてお取替えいたします。

新潮文庫

首 一 人 百

安東次男著

新潮社版

目次

百人一首のこと		一三
百人秀歌		二三
百首通見——小倉百人一首全評釈		三三
一 秋の田のかりほの庵 いほ の苫 とま をあらみ		天智天皇 三
二 春すぎて夏来にけらし白妙 しろたへ の		持統天皇 二
三 あしひきの山鳥の尾のしだり尾の		柿本人麿 四〇
四 田子 たご の浦 うら にうち出 いで てみれば白妙 しろたへ の		山部赤人 四三
五 おくやまにもみぢ踏み分け鳴く鹿の		猿丸大夫 四七
六 かささぎのわたせる橋に置く霜の		中納言家持 四七
七 あまの原ふりさけ見れば春日 かすが なる		安倍仲磨 五〇
八 わが庵 いは は都のたつみしかぞすむ		喜撰法師 五三
九 花のいろはうつりにけりないたづらに		小野小町 五五
一〇 これやこの行くも帰るも別れては		蟬丸 五八

- 一一 わたのはら八十島かけてこぎいでぬと……………参議篁 三〇
 一二 あまつ風くものかよひ路ふきとぢよ……………僧正遍昭 三
 一三 筑波嶺のみねより落つるみなの川……………陽成院 四
 一四 みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに……………河原左大臣 六
 一五 君がため春の野にいでて若菜摘む……………光孝天皇 六
 一六 たちわかれいなばの山の峰に生ふる……………中納言行平 七
 一七 ちはやぶる神代もきかず龍田川……………在原業平朝臣 七
 一八 住の江の岸による波よるさへや……………藤原敏行朝臣 五
 一九 難波潟みじかき蘆のふしの間も……………伊勢 七
 二〇 わびぬれば今はたおなじ難波なる……………元良親王 七
 二一 いま来むといひしばかりに長月の……………素性法師 八
 二二 ふくからに秋の草木のしをるれば……………文屋康秀 八
 二三 月みればちちに物こそかなしけれ……………大江千里 八
 二四 このたびはぬさもとりあへず手向山……………菅家 八
 二五 名にし負はば逢坂山のさねかづら……………三条右大臣 八

- 二六 をぐらやま峰の紅葉もみぢばところあらば……………貞信公 六二
- 二七 みかの原わきてながるるいづみ川……………中納言兼輔 三
- 二八 山里は冬ぞさびしさまさりける……………源宗于朝臣 六
- 二九 心あてに折らばや折らむはつ霜の……………凡河内躬恒 六
- 三〇 有明ありあけのつれなくみえしわかれより……………壬生忠岑 一〇
- 三一 朝ぼらけ有明の月と見るまでに……………坂上是則 一〇三
- 三二 山川やまがはに風のかけたるしがらみは……………春道列樹 一〇四
- 三三 ひさかたのひかりのどけき春の日に……………紀友則 一〇六
- 三四 誰をかもしる人にせむ高砂たかさごの……………藤原興風 一〇九
- 三五 人はいさ心もしらずふるさとは……………紀貫之 一一
- 三六 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを……………清原深養父 一二四
- 三七 しらつゆに風のふきしく秋の野は……………文屋朝康 一二七
- 三八 わすらるる身をば思はずちかひてし……………右 近 一二九
- 三九 浅茅生あさちふの小野のしのはらしのぶれど……………参議等 一三
- 四〇 しのぶれど色にいでにけりわが恋は……………平兼盛 一三三

- 四一 恋すてふわが名はまだき立ちにけり……………壬生忠見 二三
- 四二 ちぎりきなかたみに袖をしぼりつつ……………清原元輔 二七
- 四三 あひ見ての後のころにくらぶれば……………権中納言敦忠 二九
- 四四 逢ふことの絶えてしなくはなかなか……………中納言朝忠 二三
- 四五 あはれともいふべき人はおもほえて……………謙徳公 二三
- 四六 由良の門を渡る舟人かちを絶え……………曾禰好忠 二五
- 四七 八重むぐらしげれる宿のさびしきに……………惠慶法師 二五
- 四八 風をいたみ岩うつ浪のおのれのみ……………源重之 二四
- 四九 みかきもり衛士のたく火の夜はもえ……………大中臣能宣朝臣 二四
- 五〇 君がため惜しからざりしいのちさへ……………藤原義孝 二四
- 五一 かくとだにえやはいふきのさしも草……………藤原実方朝臣 二四
- 五二 明けぬれば暮るるものとはしりながら……………藤原道信朝臣 二五
- 五三 なげきつつひとりぬる夜の明くるまは……………右大將道綱母 二五
- 五四 わすれじの行末まではかたければ……………儀同三司母 二五
- 五五 滝の音は絶えて久しくなりぬれど……………大納言公任 二五

- 五六 あらざらむこの世のほかの思出に……………和泉式部 一五
五七 めぐり逢ひて見しやそれともわかぬまに……………紫式部 一六
五八 ありま山みなささげの篠原かぜ吹けば……………大式三位 一七
五九 やすらはで寝なましものをさよ小夜ふけて……………赤染衛門 一七
六〇 大江山いくの道の遠ければ……………小式部内侍 一八
六一 いにしへの奈良の都の八重やへざくら……………伊勢大輔 一七
六二 夜をこめて鳥のそらねははかるとも……………清少納言 一七
六三 今はただ思ひ絶えなむとばかりを……………左京大夫道雅 一七
六四 朝ほらけ宇治の川霧たえだえに……………権中納言定頼 一七
六五 恨みわびほさぬ袖だにあるものを……………相模 一八
六六 もろともにあはれと思へ山ざくら……………前大僧正行尊 一八
六七 春の夜のゆめばかりなる手枕に……………周防内侍 一八
六八 心にもあらでうき世にながらへば……………三条院 一七
六九 あらし吹く三室みむろの山のもみちばは……………能因法師 一八
七〇 さびしさに宿を立ちいでてながむれば……………良暹法師 一九

- 七一 夕されば門田かどたの稻葉おとづれて……………大納言経信 一五三
- 七二 音にきく高師たかしの浜のあだ浪は……………祐子内親王家紀伊 一五五
- 七三 高砂たかさしの尾上ものへのさくら咲きにけり……………前権中納言匡房 一五七
- 七四 うかりける人を初瀬はつせの山おろしよ……………源俊頼朝臣 二〇〇
- 七五 契りおきしさせもが露を命にて……………藤原基俊 二〇三
- 七六 わたの原こぎいでてみればひさかたの……………
- 法性寺入道前関白太政大臣 二〇四
- 七七 瀬を早み岩にせかるる滝川の……………崇徳院 二〇六
- 七八 淡路島かよふ千鳥のなく声に……………源兼昌 二〇八
- 七九 秋風にたなびく雲の絶間より……………左京大夫顕輔 三一
- 八〇 長からむ心もしらず黒髪……………待賢門院堀河 三三
- 八一 ほとどぎす鳴きつる方をながむれば……………後徳大寺左大臣 三五
- 八二 思ひわびさても命はあるものを……………道因法師 三八
- 八三 世のなかよ道こそなけれ思ひ入る……………皇太后宮大夫俊成 三〇
- 八四 ながらへばまたこの頃やしのばれむ……………藤原清輔朝臣 三三

八五 夜もすがら物思ふころは明けやらぬ……………俊恵法師 三三
八六 なげけとて月やは物を思はする……………西行法師 三七
八七 むらさめの露もまだひぬ真木まきの葉に……………寂蓮法師 三九
八八 難波江なばえの蘆あしのかり寝のひと夜ゆゑ……………皇嘉門院別当 三二
八九 玉の緒およ絶えなば絶えねながらへば……………式子内親王 三三
九〇 見せばやな雄島おじまのあまの袖だにも……………殷富門院大輔 三六
九一 さりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに……………

後京極摂政前太政大臣 三九

九二 わが袖は潮干しほひに見えぬ沖の石の……………二条院讃岐 四三
九三 世のなかはつねにもがもな渚なぎさこぐ……………鎌倉右大臣 四六
九四 みよしのの山の秋かぜ小夜こよふけて……………参議雅經 四九
九五 おほけなくうき世の民におほふかな……………前大僧正慈円 五二
九六 花さそふあらしの庭の雪ならで……………入道前太政大臣 五三
九七 こぬ人をまつほの浦の夕なぎに……………権中納言定家 五五
九八 風そよぐならの小川のゆふぐれは……………從二位家隆 五八

九九 人もをし人もうらめしあぢきなく……………後鳥羽院 二六三

一〇〇 ももしきや古き軒端のきばのしのぶにも……………順徳院 二六五

作者略伝……………二六七

あとがき……………二六七

索引……………二六八

百
人
一
首

百人一首のこと

世にいう小倉百人一首なるものの成立の事情は、いろいろ説があるがよくはわからない。古くは小倉山荘色紙和歌と呼ばれ、藤原定家が歌をえらんで色紙形とし洛西小倉山の別荘の障子に押したものと信じられていたようだが、じつはそういう記録がはじめて現れてくるのは定家死後百年以上を経過した、頼阿の歌学書の中である。百人一首という名称をもつ成書にいたっては、それよりさらに約五十年のちの「応永拾三仲夏藤原満基」としてのした一写本が、現在までのところ確認されている最古のものらしい。よく知られている宗祇の百人一首抄はさらに七十年あとになる。

そのあたりから、百人一首を成書にしたのは定家であるかどうか疑わしいとする説も現れ、ひいては原撰者を定家とすることにも疑をさしはさむ者も出てくるのであるが、ただ、百人一首が定家の嫡孫為氏（為家の長男）によって興された二条派歌学の奥儀書の一つとして伝えられたことはたしかなようで、頼阿は為氏の子為世の直弟子であるし、宗祇もまた二条派の実力者東常縁に古今伝授を受けた人である。満基という人物はよくはわからないが、応永本百人一首抄の内容が宗祇抄とほとんど同じであるところを見ると、これも二条派歌学を継いだと考えて間違あるまい。

くさいといえどもこのあたりがくさいのである。為家の三男為教、その子為兼が立てた京極家との抗争の中で、和歌師範家の嫡系たる面目にかけて小倉山荘色紙和歌を整備し、成書とし